様式Ｃ-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　３月３１日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：18720237
研究課題名（和文）　ナイジェリア・イボ人移民による擬制的王制の創造に関する研究

研究課題名（英文）　A Study on Immigrant Kingships among the Igbo in Urban Nigeria

研究代表者
松本　尚之（MATSUMOTO HISASHI）
東洋大学・国際地域学部・助教
研究者番号：80361054

研究成果の概要：
本研究では、ナイジェリアの都市部においてイボ人移民が創設した擬制的王制の調査を行った。1980 年代から始まる擬制的王制創造の動きを追うとともに、同制度に関する様々な言説を収集した。それによって擬制的王制の創造が、アフリカに広がった「首長位の復活」と呼ばれる現象の一端であることが明らかとなった。さらに、様々な批判のなか同制度が国内外のイボ人移民社会のあいだで拡大していく背景に、移民たちと故郷の関係の変化があることが判った。

交付額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００６年度 | 1,100,000 | 0 | 1,100,000 |
| ２００７年度 | 1,000,000 | 0 | 1,000,000 |
| ２００８年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 2,900,000 | 240,000 | 3,140,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：（分科）文化人類学　（細目）文化人類学・民族学
キーワード：文化人類学、民族学、移民研究、都市研究、ナイジェリア

## １．研究開始当初の背景

ポスト植民地時代のアフリカにおいて特に 1990 年代に入って顕著となった現象の一つに、「首長位の復活」と呼ばれるものがある。多民族が共生するアフリカの様々な国で、国家が各民族の王や首長を保護し、地域社会の代表として一定の権限を与える政策をとっている。その結果として、近代国家の樹立とともに消失するかに見えた伝統的権威者たちが復権し、国家と伝統的権威者が並び立つ状況が見られるのである。今日アフリカの多くの国にとって、国内の民族間コンフリクトを回避し、多民族共生社会を実現することが最重要な課題の一つとなっている。それら国々においては、国家による王や首長の保護政策が、コンフリクトの緩和と平和構築に向けた方策の一つと考えられているのである。

この「首長位の復活」と呼ばれる現象は、もともと集権的な権威者をもたない非階層制社会にも大きな影響を与えている。それらの社会では、新しい権威者の地位が創造されるとともに、王位や首長位と関わる様々な称号に象徴的な価値が与えられている。本研究で取りあげたイボ人移民社会における擬制的な王制創造の動きもその一つである。

## ２．研究の目的

研究代表者は、ナイジェリアの都市部においてイボ人移民が故郷の文化を模して創設した擬制的な王制の調査を行った。それによって、アフリカ社会において王の地位が持つ今日的な意味を考察することが本研究の目的である。

伝統的なイボ社会はいわゆる「無頭社会」であり、中央集権的な権威者が不在の共和主義的な社会であった。しかし現在のイボ社会には、いくつかの村落が集まった小集団ごとに「王」（エゼ）が存在する。彼らはもともと州の法令によって導入された行政首長である。しかし植民地時代から続く行政首長制の歴史の中で、行政首長の地位はイボ社会に浸透し、地域住民から「王」として認識されるようになったのである。現在では、「伝統的なイボ社会＝王制が存在した社会」とする歴史認識まで生まれている。その結果、現在イボ社会には様々な変化が生じている。

ナイジェリアの大都市には、「エゼ・イボ」（イボ人の王）と呼ばれる人々が存在する。ホスト社会が異民族の都市において、イボ人移民たちが導入した制度であり、1990 年代以降、様々な都市で見られる現象である。多くの場合、イボ人移民たちが候補者を選んだ後に、ホスト社会の伝統的権威者がそれを承認することによって、「イボ人の王」としての権威を得ることができる。

本研究では、中心的な課題を以下の３つに定めた。①エゼ・イボ制度に関する様々な言説を収集する。②事例研究を通した、イボ人移民社会におけるエゼ・イボの位置づけに関する調査を行う。③同じく事例研究を通した、特定のエゼ・イボと母村の関係を調査する。これら課題を通して、擬制的王制の実体を包括的に把握する。そしてイボ社会における王制文化をめぐる創造的な営みを分析し、王の地位が持つ象徴的な価値や影響力に関して考察する。

## ３．研究の方法

研究方法は大きく２通りある。第一に、特定都市を選択し、同地におけるエゼ・イボ制度に関して集約的なフィールドワークを行った。それによって、エゼ・イボ制度に関する具体的なデータを収集し、ケーススタディした。第二に、エゼ・イボ制度に関する様々な言説を、聞き取り調査や資料収集によって集め、エゼ・イボ制度に関する全体像を分析するとともに、同制度に対するイボ人たちの認識を把握した。

ケーススタディの対象地としてナイジェリアの旧首都であるラゴスを選択し、2007 年８月～９月にかけてフィールド調査を行った。ラゴスは西アフリカ最大の都市である。同都市はヨルバ人が干すと社会を構成しており、それに対してイボ人は移民集団のなかでも最大の人口を抱えている。フィールド調査では、ラゴスにおけるエゼ・イボ制度の歴史や現状に関するデータを、エゼ・イボ本人及びその支持者を対象とした聞き取り調査・参与観察によって収集した。また、エゼ・イボと同郷団体や州政府の関係に関しても、同郷団体の役員や政府関係者へのインタビューを通して情報を収集した。加えて、研究代表者は過去にラゴスにおいてイボ人移民たちが設立した同郷団体に関する調査を行った経験があり、その際収集した資料も分析に加えた。

ラゴスにおける調査に加え、日本の首都圏在住のイボ人移民たちを対象としたフィールド調査も行った。首都圏在住のイボ人移民たちのあいだでは 2006 年にエゼ・イボの地位創造の動きが見られた。研究代表者はイボ人移民たちを対象としたインタビューを通して、移民たちのエゼ・イボ制度に関する言説を収集した。

それらに加え、ナイジェリア大学ンスカ校やインターネットを通して、エゼ・イボ制度に関する新聞記事や文献の収集も行った。

## ４．研究成果

### （１）擬制的王制の歴史

イボ人移民社会における擬制的王制の創造は、ナイジェリア北部の都市で 1980 年代後半に始まった。例えば、北部第一の都市であるカノでは、1987 年にイボ人移民たちによってエゼ・イボの地位が創造された。そして 1990 年代半ばには、カノに限らず、カドゥナやジョス、ザリア、ソコト、カツイナ、バウチといった北部の主要都市に擬制的王制が浸透していった[*1]。

擬制的王制の普及は、1990 年代半ばまでナイジェリア北部の都市に限定していた。しかし 1990 年代後半になると、南部の主要都市でも、イボ人移民たちによるエゼ・イボの地位創造が見られるようになった。2009 年現在では、ラゴスやイバダン、リバース、クロス・リバー、エドなどの各州にエゼ・イボの地位が存在する。

### （２）ラゴスにおける擬制的王制

通常、エゼ・イボは一つの都市につき一人のみ選ばれ、その都市に住むイボ人移民全体を代表する。それに対し、ラゴスには、複数の「エゼ・イボ」を名乗る人物が存在する。ラゴス州全体のイボ人移民を代表するエゼ・イボとは別に、州を構成する地方行政区それぞれに、その地方行政区を取り仕切るエゼ・イボがいる。以下では、特にラゴス州のイボ人移民全体を代表するエゼ・イボ（Eze Igbo, Lagos）のみを指して、「ラゴスのエゼ・イボ」という表現を用いる。

ラゴスのエゼ・イボの地位が創造されたの

は、1999 年のことである。1948 年生まれアナンブラ出身のイボ人企業家が、初代エゼ・イボに選ばれた。

初代エゼ・イボの自宅の豪奢なコンパウンドの一角には、「オビ・ンディボ」（*Obi Ndigbo*）と名付けられた集会場がある。この集会場において、エゼ・イボは支持者たちを集めて集会を開き、個々人が抱える日常的なトラブルから他の民族との大規模な争いまで、イボ人移民と関わる問題について話し合いを行う。また、支持者たちは、ラゴスのエゼ・イボをイボ人移民全体の文化的代表として位置づけている。彼らは、故郷に帰省する機会が少ない者や、ラゴスで生まれ育った移民二世や三世たちが、イボ人の民族文化を学び、民族アイデンティティを維持する機会として、エゼ・イボが主催する文化行事の必要性を主張している。

初代エゼ・イボが選ばれた経緯を見てみると、選出はラゴスで活動する汎民族団体の一つを介して行われた。その後、戴冠式は、イボランドからエゼの一人を招き、彼の手によって執り行われた。さらに、戴冠式の後には、イボランドから新たに５人のエゼを招き、彼らエゼたちを紹介人としてラゴスのオバ（伝統的権威者）に謁見し、オバから祝福を受けた。

戴冠後、ラゴスのエゼ・イボは自らの支持者を集め評議会を組織している。「エゼ・イボの評議会」（*Eze-Igbo-in-Council*）と呼ばれるもので、故郷のエゼたちが開催する集会（エゼの評議会）を模した組織構成となっている[*2]。故郷のエゼたちと同じく、ラゴスのエゼ・イボは、彼がその地位にふさわしいと考える人々に対して、首長位の称号を授与する。対象はイボ人に限定されず、他民族の者にも贈られる。彼ら首長位の称号を持つ人々が、エゼ・イボの評議会のメンバーとなる。

（３）擬制的王制をめぐる言説

イボ人移民たちによる擬制的王制の創造が始まったのは 1980 年代のことであり、比較的新しい現象である。植民地時代以降、都市部に出稼ぎに出たイボ人たちが相互扶助のネットワークを構築する際に、長きにわたりその媒体としたのは王制ではなく、同郷団体である。ナイジェリアでは 1920 年代には、同郷団体の設立が見られた[*3]。

都市に移住した人々が同郷団体を設立したり、それら同郷団体が故郷の伝統行事を模したイベントを開催したりすることを、故郷の人々は、移民たちが自分たちのルーツを忘れていない証しとして、肯定的に評価し、歓迎する。しかしその一方で、移民たちによるエゼ・イボの地位創造の動きに対する故郷の人々の反応は、非常に否定的である。

今日イボ人たちの間には、民族文化としての王制の位置づけについて、相反する２つの言説が広まっている[*4]。一つは、伝統的なイボ社会には王や首長のような集権的な権威者は存在しなかったとする言説であり、「共和主義」や「民主主義」をイボ人固有の民族文化とする立場である。この言説を主張する人々は、特に高等教育を受けたイボ人知識層に多い。彼らはイボランドに現在普及したエゼ制度自体に否定的であり、エゼ・イボ制度についても、「イボ人を統べる王」という考えそのものがイボ社会にそぐわないとして厳しく批判する。

民族文化としての王制の位置づけに関するもう一つの言説は、イボ社会にはもともと集権的な権威者が存在したとするものであり、エゼの地位をイボ社会にもともと備わった民族文化とする立場である。イボランドにエゼ制度が広く普及している現在、多くの人々がこの言説を支持している。当然のことながら、故郷のエゼたちは、この言説の主唱者である。だが、イボ文化におけるエゼの地位の正統性を主張する彼らも、都市部に生まれたエゼ・イボの地位については否定的である。故郷のエゼたちは、移民たちによるエゼ・イボ創造の動きについて、それを「イボ文化の粗悪化」（bastardization of Igbo culture）と呼び、イボ社会におけるエゼの権威を蝕む試みとして非難している。エゼたちは、移民たちが自分たちの文化的代表を選びたいのであれば、「エゼ・イボ」（イボ人の王）という名称ではなく、「オニイシ・ンディボ」（*Onye isi Ndigbo*）という言葉を用いるべきだと主張している。「オニイシ」とはイボ語で「指導者」を意味し、同郷団体などの会長を表す際に用いられる。2008 年 10 月には、ナイジェリア南東地域のエゼたちが集まる会議が、都市移民たちが創造したエゼ・イボの地位を認知しないという声明を発表した[*5]。

エゼ・イボに関する評価は、ラゴス在住の移民たちの間でも意見が分かれている。移民人口が一定地域に集中している北部の諸都市の場合とは異なり、ラゴスのイボ人移民たちは州内の各地に分散して居住している。そのため同郷団体についても、対象とする出身地や会員資格を同じくしながらも、活動拠点や会員構成が異なる複数の団体が林立しているのである。汎民族団体についても、初代エゼ・イボの選出と関わった団体の他に、複数の団体が存在し、自らをラゴス在住のイボ人全体を代表する組織として位置づけている。

ラゴスのエゼ・イボ制度に関する評価は、団体によって異なる。汎民族団体については、移民たちが故郷の文化に触れる一つの媒介としてエゼ・イボの地位の必要性を認める一方で、自分たちのあずかり知らぬところで選出された現在のエゼ・イボについては公的に

認めていないものもある。それらの団体のなかには、別の人物をラゴスのエゼ・イボとして擁立している団体も存在する。

（４）イボ人移民社会における擬制的王制の位置づけ

エゼ・イボの地位は、移民たちが故郷のエゼ制度を模して創造した新しい権威者の地位である。エゼ・イボによる称号制度の導入や評議会の設置は、全て故郷のエゼのそれと類似した作りとなっている。当然のことながら、1970年代の国家政策を契機として生まれたエゼの地位がイボ社会に浸透することなくして、移民たちによるエゼ・イボ創造の動きも生まれなかったであろう。したがって、イボ人移民たちによる擬制的王制の創造は、ポスト植民地時代の「首長位の復活」が今日のイボ社会に与えた影響の大きさを如実に物語っている。

しかしその一方で、エゼ・イボ制度は、都市と故郷の双方において、イボ人たちの間に幅広く受け入れられているとは言い難い。

都市においては、その地に住むイボ人移民たちの多くが、エゼ・イボの権威を認めているわけではない。国家の後ろ盾や法に基づく承認がないエゼ・イボたちは、それら権威を支持しない人々を従属させる手段を持たない。そのため、実際にはエゼ・イボは王というよりは、むしろ王位を媒介とした自発的アソシエーションの長といったほうがふさわしいであろう。

加えて、イボ人移民たちによるエゼ・イボ制度の創造については、故郷のエゼたちを中心に厳しい批判の声が上がっている。エゼ・イボの地位に就いた者は、対象となる都市に居住するイボ人たちを代表する「王」（エゼ）であると主張する。しかしその一方で、故郷に戻れば、彼らは出身共同体のエゼに従属する立場にある。そのため、エゼ・イボの地位は、移住先の都市と故郷の間に、権威関係のねじれを生み出しているのである。

厳しい批判にもかかわらず、擬制的王制創造の動きがナイジェリア国内外のイボ人移民社会に拡大している背景には、移民たちと故郷の結び付きの変化がある。これまで、故郷を離れナイジェリア国内外で暮らすイボ人移民たちについては、彼らの多くが移住先の地において「一時逗留者」の立場にとどまり、都市と故郷を行き来する二重生活を送り続けることが指摘されてきた。しかし今日では、移住生活の安定化や長期化とともに、自らを「定住者」として位置づけるようになった[*6]。その過程で、多民族が共生する都市において、他の民族も認知する王位や首長位を媒介とし、故郷からも自律した権威制度として、擬制的王制が創造されたのである。

注釈

*1 Osaghae, Eghosa E. *Trends in Migrant Political Organizations in Nigeria: The Igbo in Kano*, Ibadan: IFRA, 1994.

*2 移民たちの故郷であるイボランドのエゼ制度に関しては拙著『アフリカの王を生み出す人々－ポスト植民地時代の「首長位の復活」と非集権制社会』（明石書店、2008）を参照のこと。

*3 Smock, Audrey C. Ibo Politics: The Role of Ethnic Unions in Eastern Nigeria, Cambridge: Harvard University Press, 1971.

*4 松本尚之「現代イボ社会における王の誕生－民族文化をめぐる新たな言説と歴史認識」『民族學研究』68(3):325-345。

*5 All African.com Nigeria: Ohaneze, South-East Monarchs Move Against Diaspora's Eze Igbo", http://allafrica.com/stories/200810210729.html (October 28, 2008).

*6 Osaghae, ibid, pp.71-74.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

松本尚之、「アフリカ都市部における移民と王制－ポスト植民地時代のアフリカにおける伝統的権威者の象徴的価値」『地域研究』、9(1):131-146、査読無、2009年

〔学会発表〕（計　３件）

松本尚之、「ナイジェリアにおける都市移民と王制－イボ人移民による王制を媒介とした＜つながり＞の構築」シンポジウム『連帯（つながり）の文化人類学－社会関係の持続と変容』、2008年11月29日、東北大学

松本尚之、「ナイジェリア近現代史のなかの首長たち－多民族共生社会における国家政策と伝統的権威」大阪大学世界言語研究センター・プロジェクト（民族紛争の背景に関する地政学的研究）アフリカ研究会、2007年11月3日、大阪府豊中市千里ライフサイエンスセンター

松本尚之、「ナイジェリアの王を生み出す人々－ポスト植民地時代の「首長位の復活」と非集権制社会」白山人類学研究会、2007年10月22日、東洋大学白山キャンパス

〔図書〕（計　２件）

北脇秀敏・高橋一男・松本尚之他8名（3番目）、『国際共生社会学』、東洋大学国際共生社会研究センター編、p.37-52、2008年

松本尚之、『アフリカの王を生み出す人々－ポスト植民地時代の「首長位の復活」と非集権制社会』、明石書店、全324頁、2008年

６．研究組織
(1)研究代表者
松本　尚之（MATSUMOTO HISASHI）
東洋大学・国際地域学部・助教
研究者番号：80361054

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし